

開催地名：大分県豊後大野市	
開催日時	令和2年1月25日（土） 13：30 ～ 15：00
開催場所	豊後大野市総合文化センター
語り部	菅野 祥一郎 （岩手県陸前高田市）
参加者	自主防災組織、防災士、防災関係機関、地域住民 約200名
開催経緯	当市では、南海トラフ巨大地震による被害が想定されており、市報や各種防災講話を通じて、地震対策の啓発を行なっている。 しかしながら、近年、大規模地震を経験していないことや、内陸部であるため南海トラフ巨大地震の津波被害が想定されていないことから、市民の地震に対する防災意識の低下が懸念されている。今回は東日本大震災の語り部の講演を実施し、防災に対する意識の向上を図りたい。
内容	（１）はじめに 東日本大震災から間もなく9年経とうとしている。以前はメディアも比較的大きく報道してくれたのだが、時間が経つにつれ、報道されることも少なくなってきた。露出が減ると、自然と人々は、災害のことを忘れてしまう。ここ10年で、熊本、大阪、北海道などの地震、全国各地での豪雨等、様々な災害があった。私は政治家でも研究者でもないが、校長として経験したことを話したいと思う。 （２）津波被害の特徴 津波災害には3つの特徴がある。1つ目は、一度に多くの命が奪われてしまうことである。信じられないかもしれないが、あの時の地震では、わが家では棚にあったもの何ひとつ落ちてこなかった。亡くなった方々は、全て津波により犠牲となった。一度に多くの方が亡くなるのが津波である。2つ目は、遺体が遠くに流されてしまうことである。そのため、なかなか見つけることができず、行方不明者の数が多くなる。3つ目は、忘れられるということである。何の前ぶれもなくやってきた前回のチリ地震による津波は、50年以上も前である。津波は、台風のように毎年やって来るわけではない。頻繁に来ないことはいいことであるが、このように時間が経ち過ぎることにより、いつの間にか忘れられてしまうのである。 （３）避難について 東日本大震災が発生したとき、校長であった私は、所用で学校を離れていた。急いで学校に戻るために車を走らせたが、戻る途中の橋が通行止めになっており、思いのほか時間がかかってしまった。学校に着くまでの間、私の心は震え続けた。学校に到着したとき、子どもたちは校庭に整列し、住民は地域ごとに集ま

	っていた。30 分もの間、校庭に止まり、避難をしなかったのは、マニュアル通りに第一避難所である行程にいたことで、安心した気持ちがあったのだと思う。 この時、すでに津波は川を遡上していた。私は校庭で、この異様な雰囲気の中、何とか子どもたちを避難させるため、マニュアルにはなかったが、山に登る判断をした。何度か自分の足でこの山に登ったことがあったため、子どもたちも容易に登れるだろうと考えたからである。間一髪であったが、学校に戻り、状況を判断して指示できたこと、さらに、その指示を、職員と地域住民の方にしっかりと受け止めてもらえたことが、一人の死者も出さなかったことにつながったと思う。 私は 60 年間学んだ判断力、決断力、指導力を、この時に全て使った気がする。なぜ受け止めてもらえたか。それは私が校長という立場であったため、地域の住民と顔なじみであったからであると思う。平時であれば、確かにマニュアルに従って行動するが、マニュアルに捉われない行動をすべき場面もある。責任のある立場になれば、命を守ることをまず考えなければならない。 (4) 震災の恐ろしさを忘れずに 家族が離れていれば、お互いが安全に避難していることを信じて行動すること、子どもたちが避難すれば大人もついていくこと、正常バイアスの否定、自然を侮ってはいけないこと、デジタルよりアナログが頼りになること等、津波から得られた教訓は少なくない。 陸前高田市の復興は日々進んでいるが、私たちは、当時多くの方々が亡くなったことを忘れず、命を大切に生きていかなければならない。皆さんも、機会があれば、是非陸前高田市を訪ねてほしいと思う。
開催地より	今回の講演をきっかけに、決して他人事ではないと感じた。平時の備えに努め、一人ひとりができることをこつこつと積み重ねて、地域全体の防災力向上につなげていきたい。